

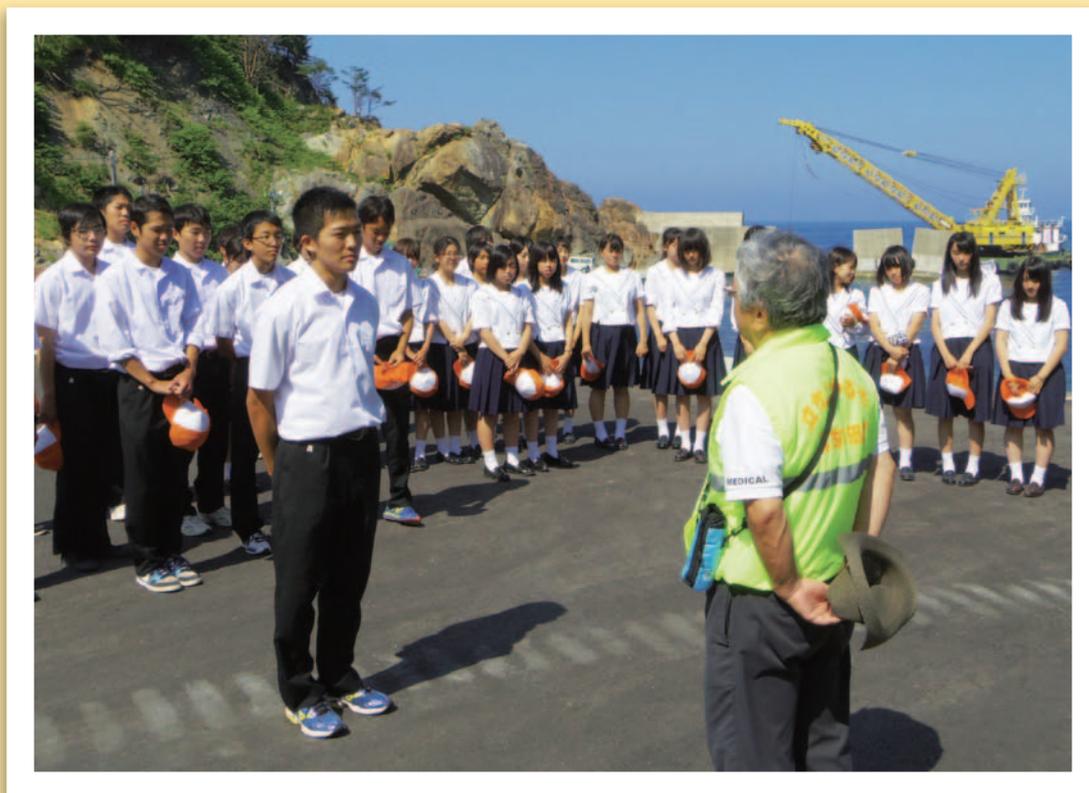
事例2

岩手県宮古市

地域資源を生かしたまちづくりへ

特定非営利活動法人 立ち上がるぞ!宮古市田老

理事長 大棒 秀一さん



県内の高校生に対する防災教育の受け入れ(提供：NPO 田老)

生活再建か地域再生か。関わる人たちが減っていくなかで解散も考え、組織の存続も危ぶまれていた。そんななか、外からの目によって地域の財産に気づく。自分たちの活動は、津波の経験を検証・発信することで地域特性を生かしたまちづくりをしていくことだ、という活動の方向性を見つけ、地域住民とともに動き出している。



大棒秀一(だいぼう・しゅういち)
1951年3月岩手県宮古市田老(旧田老町)に生まれる。昭和三陸大津波が発生した3月3日の午前3時に津波避難訓練のサイレンが鳴り響き、避難した寒い夜明け前の山の上で、たき火を囲み長老より当時の津波の様子を聞いて育った。2011年3月末に放射線技師を定年退職し、故郷宮古市田老に帰り、仲間とともに団体を立ち上げた。

2012年4月、大棒さんは…

■ NPOを続けていくためには何が必要か

昭和8年の三陸津波を経験した田老の先人は津波被害を受けたその場所に日本一と言われる防浪堤を築き、まちを復興させてきた。日本一の防浪堤を有し「津波防災の町」を宣言してきた田老のまちは、東日本大震災で壊滅的な津波被害を受け、その自負は粉々に打ち砕かれてしまった。

生まれ育った町が被災した大棒さんは、2011年4月に田老に戻り、地元の同級生たちと「立ち上がるぞ！宮古市田老」（以下、NPO田老）を立ち上げて、まちの復興のために活動をしてきた。だが、宮古市から復興まちづくり計画の提案がされ、被災から一年が過ぎた頃から仲間たちはまちづくりよりも生活再建が優先となり、活動への協力、参加が少なくなってきた。一緒に動く仲間が減ってしまい、団体の解散も考えたという。

また、大棒さん自身もそれまで放射線専門技師として定年まで働いてきたため、NPO活動そのものへの知識がない状態で活動をしてきた。岩手県内におけるNPOの不祥事もあり、地域住民の「NPO」に対する信頼性が低いなかで、市民活動として共感を得て活動をつづけていくためにはどうしたらいいのかという悩みを抱えながら活動をしていた。そんな時に育成・強化プロジェクトのことを知り、NPOの運営に関する知識を深めて、まちの復興のために活動を続けていけるようにしたいという思いで参加することになった。

大棒さんの取り組み

■ 体に染み付いている防災意識

大棒さんの子どものころから、田老地区では毎年3月3日の午前3時（昭和8年の大津波発生日時）に、津波避難訓練が行われていた。寒い真夜中に山に避難し、焚き火にあたりながら長老が子どもたちに当時の状況を語ることで、津波の怖さと避難の大切さを言い伝えてきた。「とても寒かったけれど、あの時に聞いた話は今も体の中に残っている。だから今の活動をやっているのだと思う」と大棒さんは言う。子どもの頃から体に染み込んだ津波防災に対する意識、それが大棒さんにとっての活

動の原動力でもあるようだ。

■ 生活再建かまちづくりか

震災から1年目を迎えるころ、防潮堤の位置や高さ、国道の移転などに対して、さまざまな住民の意見をどうにかひとつにまとめ、地域の意見として県や国に提案した。しかしその意見は反映されず、制度の難しさや壁にぶつかっていた。そのうち、何年もかかる高台移転団地の完成などを待ってられないために自分たちの独自の生活再建を考え始める人も出始め、地域の団結意識のほころびが広がっていく。一緒に活動してきた仲間もそれぞれの生活再建を考えはじめる。当然まちづくりよりも自分の生活が優先になり、活動に参加する人が減っていった。また、外部から入った助成金の使い道など活動資金に対する意見も行き違い、解散論まで出てしまった。結果として、2011年度の総会で一緒に活動してきたメンバーのほとんどが脱退する事態となってしまったのである。「まちの復興のために」という強い思いが、次第に「やれる人がやっていけばいい」というように気持ちが離れてしまったのかもしれない。

そんな時期に始まったのが、この育成・強化プロジェクトだった。プロジェクト前半の15の力の集合研修は、大棒さんにとって新たに学ぶことばかりで、一緒に参加しているメンバーは若い人が多く、気後れしてしまったようだ。しかし、その後のメンターサポート期間中に利用したインターンシップ・プログラムへの参加が、大棒さんの活動に大きなきっかけを与えることとなった。

■ インターンシップ・プログラムへの参加

宮古市は、復興まちづくり事業としてバイオマスを活用した官民参加の新たなエネルギー産業を2012年11月に立ち上げた（宮古市ブルーチャレンジプロジェクト）。このまちづくり事業で言われている「官民参加」の民は民間大手企業であり、宮古市での雇用創出につながるが見込まれた。しかし、高齢者の多い田老の復興を考えると、高齢者が生きがいをもった生活がどのように創出できるかが本来のまちづくりのテーマであり、田老独自の官民（民は市民）参画のまちづくりをしていく必要があると考えた大棒さんは、ソーシャルビジネスの手法で市のエネルギー事業に参入できないだろうか考えた。

そこで、ソーシャルビジネスを学ぶためにインターンシップ・プログラムを利用した。

インターンシップ受入先は、山梨県にある「NPO法人 えがおつなげて」だった。農をはじめとした地域共生型のネットワーク社会を創ることを目的に、「村・人・時代づくり」を行っている。インターンシップでは、実際に活動に参加してもらいながら、実例を見聞きすることができたため、15の力で学んだことが具体的にリアリティを伴って理解することができた。

■「経営」の必要性

「えがおつなげて」が実施している企業ファーム事業の営業について話を聞いたことで、活動をしていくうえで、持続可能な体力(資金)づくりが必要だということを理解した。それまで団体メンバーのまちの復興に対する思いのみで活動しており、財源についてあまり深く考えずに活動してきた。活動はボランティアでやっているのだから、対価を得てはいけないと思いついてきた。事業を継続して目的を達成するためには、きちんと対価を得るしくみづくりが大切であり、財源を充実させた組織基盤をしっかりと確立していくことが重要であることを学んだ。また、資金は補助金や助成金に頼っていると事業終了ごとに人の出入りも発生してしまうので、最低限の団体の基礎体力を維持していくことができなくなる。つまり自立した組織として、財源のあり方も含めた「経営」を考えていくが重要であることを強く感じ取った。

■ 団体がすべきことは何か

もう一つの大きな気づきが、「ブランドを生かす」ことだった。この気づきが団体の活動に影響を与えたといっ



「えがおつなげて」のスタッフたちと(提供: NPO田老)



昭和の大津波後に作られた防潮堤(提供: NPO田老)

ても良いだろう。

「えがおつなげて」のスタッフと意見交換をするなかで、NPO田老のSWOT(注)について聞かれたことが、団体の現状分析とこれからの方向性を考える機会となった。

田老には、有名な防潮堤、水産業のわかめ、観光資源としての三王岩、といった日本一がある。それらは田老のブランドでもある、そしてそれをどのように生かすかでまちの魅力を伝えられる、という意見がだされた。そのヒントから大棒さんが導き出したのは、「『津波防災の町』宣言を生かせないか」ということだった。NPO田老の役割として、津波防災の町だからこそそのまちづくりをしていくことが、先人の知恵と努力を引き継いでいくことだと考えたのである。

NPO田老は、避難所対応、防災ツアー受入、著名人の訪問対応、まちづくり勉強会、ジオパーク構想、市への意見提案、エネルギー事業への関心、などさまざまな活動を実施してきた。しかし、「田老のまちづくり」のために何を大切にしていくのかを意識して活動を組み立てていく必要がある。インターンシップに参加したことで、NPO田老のこれから目指すことは何かの具体的なイメージが生まれてきた。将来的な目標は、「市民参加」の農業事業を起し、高齢者が生きがいを持って暮らせるまちにしていくことだと語る大棒さんだが、まずは、田老の津波被害検証と伝承記録を作り、経験と教訓を内外へ発信してことが必要だと考えた。

※注: 組織の内部環境と外部環境を評価するためのフレームワーク。内部環境を強み(Strength)と弱み(Weakness)、外部環境を機会(Opportunities)と脅威(Threat)に分けて整理することで、戦略を考えるツール。



地域のボランティアとともにいった検証聞き取り作業(提供:NPO田老)

成果と変化

■ インターン先での行った団体分析と意見交換

インターンシップ中の「えがおつなげて」のスタッフとの意見交換で、大棒さんは『津波防災の町』宣言を生かした田老のまちづくり」という方向性が見えてきた。

NPO田老のSWOTについて聞かれたときに、大棒さんはすぐに答えることができなかったのだが、宿題に思ってもらってじっくり田老について考える機会となった。その結果をインターン最終日に「えがおつなげて」のスタッフに発表し、それに対してさまざまな意見やヒントをもらうことができた。

田老地区のことや組織のことを分析してみると、いろいろな特徴が見えてきた。田老のまちには誇れるものがある。いくつかある。「えがおつなげて」のスタッフから、「そん

なに日本一があるなら活動しやすいのでは」、「どのように付加価値を付けるかは取り組み次第なのでは」といった意見がでた。そのような意見ももらったことで、大棒さんは「田老の特徴・ブランドは『津波防災の町』宣言の町だ。それを生かした活動ができるのではないかと気づいたのである。

インターンに参加する前は、被災した町をどのように復興させようか、市が復興事業として取り組もうとしているスマートコミュニティ、ブルーチャレンジプロジェクトのなかで市民参画の市民農園をどう実現させようかと考えていた。しかし、「津波防災の町」として、まずは田老の津波被害検証を行い、それを内外に発信していくことが、NPO田老にとって今すべき活動なのではないか、という考えに至った。大棒さんは、その検証作業をNPO田老の短期的目標として位置づけ、そのために動き出した。

■ 検証と伝承記録誌作成への取り組み

インターンで考えた短期的目標達成のため、2013年10月に開始した組織力向上サポート助成を利用して、2011年の震災における田老の経験を内外・後世に伝え、世界の津波防災、減災に役立てるための検証と伝承記録誌づくりを行うことになった。2012年度に作成した記録をベースに、地域の人々に当時のことを聞かせてもらい、避難路検証なども行った。その制作過程に住民に関わってもらうことで、田老の復興と生活再建・住民の自立に寄与できると考えている。それは、田老の復興に対する同じ思いをもった仲間が増えることにもつながり、



組織力向上サポート助成で作成した「検証記録集」



NPO田老の組織基盤にもつながると考えたからだ。

「今回の津波被害をきちんと検証をして記録を残すことは、追悼であるとともに津波防災宣言の町としての責務だと思っている」と大棒さんは伝承記録誌作成の意義を語る。

このように、当初ボランティア精神でやってきた活動は、地域住民の共感を得ながら、自分たちの役割を意識した活動を組み立てるようになってきた。また、組織の運営・方向性を確認・決定するために理事会を月に1回開き、情報交換、事業の役割分担等を決めるなど、少しずつ組織としての形態ができてきている。

NPO田老は、「津波防災の町」宣言のまちとしての津波防災・減災の取り組みを国内外に発信することで、田老の復興のみならず、他地域にも寄与できる存在になることが期待される。

これから

■ 地域づくりは防災につながる

大棒さんは、まちの祭もなくなり、コミュニティの力が薄れ、地域力が弱くなっていると感じている。田老の津

波の検証作業を通じて、地域の人々に関わってもらい、田老の復興に対する同じ思いを持った仲間が増えることを目指した。それは、地域力が強くなることで、防災力も強くなると考えているからである。

津波太郎（田老）とまで揶揄された防潮堤のある「津波防災の町」宣言をしたまちが、大きな被害にあったからこそ伝えられる検証は、地域の復興のためであることはもちろん、日本の他の地域、とくに津波災害が予想されている地域、そして世界の津波被害を減らしていくことになるかと大棒さんは考えている。田老の経験・検証を内外に発信していく活動をつづけていくつもりだ。2015年3月に仙台で開催される世界防災会議でも、田老での経験を伝える機会を得られないか提案を出しているところだ。

また、市民参加による市民ハウス農園（市のエネルギー政策に絡めた）を実現させたいという将来的な展望も、大棒さんはもっている。これは、震災により崩壊してしまったコミュニティ再生のための場づくりである。また、高齢者の運動不足解消やいきがづくりにもつながると考えている。大棒さんの地域への思いと挑戦はまだまた続いている。

NPO田老のSWOT分析

S

Strength

[強み]

- 日本一がある（防潮堤）
- 豊かな海産物（真崎わかめ、うに）
- 風光明媚である（三陸復興国立公園、三王岩）
- 震災による支援、注目がある（助成金、支援金、取材など）

日本一がある!!!

田老のブランド!!

O

Opportunities

[機会]

- スタートラインにたっているまちづくり
- 提案の仕方で大きな仕事ができる

発想の転換で魅力ある地になれるのでは?!

W

Weakness

[弱み]

- 過疎が進んでいる
- 跡継ぎがない
- 震災によりコミュニティが失われてきている
- 支援金、補助金などにより自立心が薄れてきている

T

Threat

[脅威]

- 人口流出
- 市町村合併により自主性が失われている
- モチベーションの低下

梶山 亨治郎さん（伝承記録座談会参加者、会員）

このNPOを解散する、と言っていた時期もあったけれど、がんばって続けてきている。ふるさとを思う大棒さんの強い思いに共感して、応援しています。私は、ふるさと田老をもとの形に再建できるとは、いまだに思えない。でも、この検証で確認したこと踏まえて、新しい田老のまちづくりの青写真をつくっていくことができる。この検証は、今回の大津波の経験を将来に残していくための、大きな仕事だと思っています。この活動が「タンポポの種」のようにどこかに飛んでいって、いろいろな所で花を咲かせる。田老の中だけではなく、外にも防災の大切さを伝えていくことができる。この活動は、将来に残ることです。こつぱれ(がんばれ)。

金沢 洋子さん（ボランティア・会員）

復興支援員として堤防の視察案内などをしていたのですが、その仕事をやめ、気持ちも時間も余裕ができてきたので、去年からこちらの活動に参加しています。視察に来る高校生などに、避難のときの様子や仮設住宅での生活について話をしたりしています。

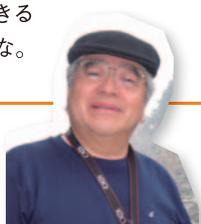
言葉や形ばかりが外に伝わるのではなく、記録や検証と一緒に伝えていくことが大切。みんなそれぞれいろいろな思いや考え方があるからね。いろんな経験をきいてほしい。

避難所では避難した人同士で助け合いました。人の力は合わさると強い力になる。私たちは「被災者」から抜け出すことが次のステップだと思っています。これから田老の町が、死んだ町、生きた町どちらになるのも、自分たちの責任ですから。



大棒さんにとっての「市民活動」とは何ですか？

自ら進んで、生きがいをもって参加できる活動。意識をもって、納得できる活動ができることじゃないかな。



【団体プロフィール】

特定非営利活動法人 立ち上がるぞ!宮古市田老
〒960-8034 岩手県宮古市田老字荒谷51番地15
TEL. 090-7002-0915
URL. <http://npotarou.web.fc2.com/>
理事長 大棒秀一
設立 2011年（法人格取得 2011年）

●団体概要

2011年3月11日に起こった東日本大震災の大津波で壊滅的な被害を被った被災者が、自立復興に向けた活動を行っている。大津波体験をふまえた防災教育訓練、避難所の整備を行い防災の町田老の名にふさわしい町づくりを応援するために2011年7月に設立。2011年10月NPO法人格取得。医療・保健・福祉を充実し、情報・自然エネルギーを取り入れた住みよい岩手県宮古市田老の町づくりに貢献することを目的として活動している。

●2013年度

運営体制：役員5名、スタッフ9名(非常勤有給：9名)
収入総額：3,115,068円